

# フィンランドの作家たち（その3）

## Finnish Writers in Youkobo 2018

Finnish Writers in Tokyo in cooperation with the Union of Finnish Writers, Helsinki and Youkobo Art Space, Tokyo

### 目次

・まえがき 村田弘子

・エッセイ

「東京の桜」

アンネリ・カント

「能へと続く螺旋階段」

ヘンリーカ・リンボン

「沈黙の芸術」

エレナ・マディ



遊工房におけるアーティストや研究者の受入は1989年より始まり、海外からの作家の創作・研究活動として定着した。国際機関からの推薦枠の受入も年々増えてきている。本プログラムは、フィンランド作家協会（UFW The Union of Finnish Writers, Suomen Kirjailijaliitto）と2016年より始め、フィンランド作家の受入は今年で3回目となる。

3名の作家が交代で1ヵ月のリサーチ滞在を行い、主に新作を生み出す良い機会となっている。エッセイは、滞在中の異文化体験や、ご本人の作品についてなど忌憚のない感想やご意見を頂ける機会となっている。作り手とは少し異なる書き手からのコメントは、大変刺激的で面白い。同時期滞在するアーティストたちにも少なからず影響を与えていると思う。

第1次覚書の3年間に、10名の作家の受入れを無事終了することが出来た。新たな覚書に基づき、来年2019年3月からも継続してフィンランドからの作家の受入を歓迎します。

### 2018年・FWU招聘・滞在作家

2018年3月2日～31日 アンネリ・カント

2018年4月1日～30日 ヘンリーカ・リンボン

2018年5月3日～29日 エレナ・マディ



#### アンネリ・カント

彼女は作家、劇作家で脚本家として活躍している。独創的な作家であり、その作品は子供向け、歴史小説、演劇やテレビのシリーズ脚本も含まれている。文学作品は、1918年と1600年のフィンランドの内戦に焦点を当てており、迫害された魔女や殺人鬼、あるいは武器の中の赤い女のような、特別な人々について描いている。また、10代前の読者に、子供向け絵本シリーズや本も書いている。彼女は本やテレビのシリーズなど様々な賞を受賞している。



#### ヘンリーカ・リンボン

フィンランドで生まれ、スウェーデン語を話す詩人である。現在ヘルシンキを拠点に活動しており、1988年にデビューして以来、彼女はいくつかの詩集や小説、エッセイなどを出版している。また、フィンランド語からスウェーデン語への詩の翻訳も行っている。彼女の最新の詩的エッセイの本では、2012年に初めて来日した際のことを紀行している。



#### エレナ・マディ

彼女は、バルト海に浮かぶ古風な小島で執筆をしており、美しいフィンランドの自然に対する彼女の愛情は、文章にも散見される。また、スタンフォード大学で教育を受けた経験を持つ。彼女は数多くの活動しており、特にシンガー・ソングライターとして、フィンランドやスカンジナビアのラジオでヒットを作っている。新しいシリーズの「the Body Jumper」は数年前に書いたある歌に基づいている。

## 東京の桜

アンネリ・カント

私は3月を遊工房の素晴らしいレジデンスで過ごした。中庭にある桜が徐々に咲いていくのを眺め、私が帰国する頃には満開であった。東京との別れは、成田の長い桜並木を楽しみ、忘れられない景色となった。

私は日本に来ることをずっと夢見ていた。きっかけは娘が13歳の頃、日本に興味を持ち始めたこと。彼女は日本語を学び、横浜での交換留学を経験し、現在4年目になる。私たちは、フィンランドの家で3人の日本人留学生を受け入れてきた。そのうちの1人は、今回、母親と祖父母と共に私に会いに遊工房まで来てくれたのだ！こうした背景から、私は来日前から日本との繋がりがあったのだ。

フィンランド作家協会の助成を得られたことは、素晴らしい幸運であった。1ヶ月という期間は単なる旅とは異なる滞在となった。

当然、娘は個人ガイドとして、そして通訳者として、大変助けになってくれた。また、タイを拠点に活動するビデオ製作者である息子も私たちに会いに来てくれた。息子の婚約者が3月に、仕事の為に東京に来たこともあり、私たちは東京で家族との再会を果たした。

しかし、この1ヶ月間は家族のことだけではない。

夕方はテレビやNetflixがないと長かった。そして雨の日や、雪の日までもあり、外出する気になれないこともあった。そのため、私は執筆に励んだ。私は1本の映画の台本とおよそ20の児童短編小説を書いた。それは苦労を要した。それほど容易いものではない。私は、滞在の結果に、むしろ満足していると言っていいたい。遊工房の良好なインターネット環境のおかげで、日常的な用事も、また、進行中のいくつかのプロジェクトの交渉、推進をも可能となった。

私の主な目的は、日本文化と芸術の何かを理解し、新しい印象を得ることだった。また、これから書く、日本の交換留学についての若者のための本の材料も集めた。

これを書いている6月の今、日本にいた時から2ヶ月が経とうとしている。最も印象的な経験は？何を覚えているか。

東京の交通。あらゆるものが完全に機能している。人々は急がず、周りを押すこともない。彼からは人前では携帯電話で話すこともない。

遊工房の地域。とても平穏で静か。

生活の日本式嗜好。全てが美しい。カップ、ボウル、お皿は優美である。お弁当も彩、形、全てがとても素晴らしい。公園は美的な経験である。

日本人の心理はフィンランド人にも似ている。

都市における有効なリサイクルシステム。

森美術館とそこからの素晴らしい東京の景色。

京都。お寺、祇園、素晴らしい駅、着物。

日本食。いつも美しく、軽くて、美味しい。

代々木公園でのお花見は素晴らしかった。陽気な人々、美味しいご飯、そしてとても綺麗。誰も周りに紙くずを散らかさず、ゴミ袋を持って来ているのだ！

上野の素晴らしい博物館。

浅草までの隅田川沿いの船旅。桜の時、日も暮れて、通り過ぎる提灯を灯した船。娘、息子、娘の友人のメイ、そして息子の婚約者ロッタと浅草で集まった。私たちは散歩をし、有名な朝日ビールの建物にある巨大な金色の彫刻を見たり、浅草寺周辺の桜の樹の下で小さなグループの人々が花見を楽しんでいる。私たちは様々なご馳走をたくさん頂き、長い夕食を楽しんだ。忘れない1日である。

そして最後に、遊工房のとても温かく思いやりのあるスタッフたち。彼らは滞在者たちを歓迎し、心地よくするため、本当に最善を尽くしていた。また、東京にこんなにも多くのフィンランドファンがいたのかということにも驚いた。遊工房で私のトークイベントを開催した際、およそ20名もの参加者がおり、その多くがフィンランド語を話したのである！素晴らしい！





## 能へと続くらせん階段

ヘンリーカ・リンボン

4月1日に私が日本に着いた時、すでに桜吹雪のさ中であつた。褐色がかつたピンク色の花びらが道に散り敷いている。中には螺旋階段を伝つて、遊工房の2階にある私の部屋にまで彷徨ってくるものもある。私は、このまばらに家具が備え付けられた部屋をすぐに自宅のように感じ、特に庭を望むバルコニーからの景色を楽しんだ。



今回は3度目の日本、2度目の東京での滞在であつた。私はまず、以前訪れたところから巡り始めた。上野の国立博物館では能面の展示を観、それが今回の滞在の全てのきっかけとなつた。その数日後、私は実際に能を観る機会を得、地獄にいる鳥「善知鳥」の演目を観た。能面と舞、明快な構造は私にとつても大きな印象を与えた。鳥を騙し撃つたことから、地獄に墮ちた男の悲痛や憤怒。家族の願いも虚しく、男は救われることはなかつた。

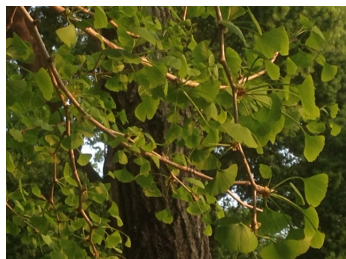


数日後、私は新宿の紀伊国屋書店で英語で書かれた能の本を購入した。そして滞在中、毎晩のように寝る前に読み、楽しんだ。私は能というものはとても奇妙で詩的で非常に訴えかけるものであることがわかつた。滞在中に何度も明らかにその本から影響を受けた夢を見た。

私にとって、日本にいることは、刺激的であり同時に安らぐことがわかつた。私はこの観光客にもあまり会わないような、いわゆる日本の住宅街での滞在中が気に入り、賑やかな新宿のような混雑した場所から、遊工房行きの電車とバスでその移り変わりを楽しいものと感じた。また、公園や庭、温泉での休息や素晴らしい食事の楽しみも見出した。

フィンランドでは見たこともない種類の魚やきのこ、ピクルスなど、食料品を買うような単純なことも冒険であつた。4月にこんなに暖かいのもフィンランドには無いものだった。最初は東京がどれほど暖かいのか信じられず、いつも着込んでしまった。しかし、私は学び、すぐに部屋に靴下とスカーフを置いて行つた。大都市東京は私を興奮させ、好奇心を掻き立てた。こんなにも巨大で多様な都市が支障なく機能して…とにかく素晴らしい！滞在中のものも移動するのも容易で、しかも親しみやすい。

この滞在中は、日本に対する知識と想いを深めた。私は遊工房に滞在している他のアーティストや親切なスタッフとの小さなコミュニティの一員になつたことを楽しんだ。来日前、私は翻訳者の畑中麻紀さんに連絡を取り、滞在中が始まってから何度か会つた。私たちは翻訳を修正し、そして彼女は私を横浜に案内してくれるなどをし、友人になつた。日本に行く度、私は自身の期待が非常に高すぎて、がっかりすることになるのではと少し怖くなる。しかし、結果は異なり、今回も同様、滞在中は私の予想を超えるのだ。ヘルシンキに戻ると、私は成長し、着想を得、変貌したように感じる。私は東京で作成したノートを見直し、展開したい筋をいくつか見出す。また、私の想像力にいかにか作用するのか感じつつ能の本も読み続ける。それらの影響の下に思いもかけない、不思議な詩が、きっと現れるに違いない。







日本への旅は偶然だった。私は気まぐれに、レジデンス助成金を申請した、いずれはというぐらいの気持ちで、本当に今回選択されるとは思っていなかった。私はスタンフォード大学で日本語だけでなく、日本の歴史、東アジアの芸術、そして日本の経済も学んだ。そして、次の小説に想像上の日本で様々な出来事を起こす計画をしていた。結果として、申請書は私の偏向した視点を通して強く見えたのだ。だから、ドラマチックに言うと、私が選ばれた1人だと解った時の喜びを想像して欲しい。この旅の全てが、感謝の訓練と謙虚さの追求であることがわかったので、多分私がどう感じたかはその兆候だったのだろう。

幾多の日本の書籍を読んだにも関わらず、私は、殆ど一から学ばなくてはならないと分かっていた。このことで、私は完全にオープンマインドで日本に向かった。締め切り間際だったため、飛行の前夜まで次の小説の執筆の佳境の最中にあり、日本での特別な計画もほとんど作っていなかった。それでも、私の知識は、なんと微細なことだったかと驚いた。また、多くの潜在的な先入観があった。

私は、未解答の質問という刺激的なセットに置き換え、それらの良し悪しすべてをあらわにする機会を得たことに大変喜んでいて。さらに嬉しかったことは、フィンランドと日本は多くの事柄で正反対だったが、私の心的な帰属が類似しているように感じた。私の本で人を結びつけることは、愛、思いやり、優しさであり、より深いスキームとして、他のものは重要ではない。(冗談だが…)

例をあげれば、私は長い間、他者が我々を見たときに見えるものよりも、我々が見るもの、そしてみたいものによって定義されると感じていた。日本では、まるで自宅にいるように感じた。私は魚に混じって泳いだ。その魚は、私と同様何も見ていなかった。なぜなら魚たちは私のようにただ水を眺めていただけだから。特に婦人たちは、まさに私がいつも習慣としてるように葉や花の写真を撮影し、いつもの私のように静かに公園をそぞろ歩いていた。私が会った日本人は、静かで孤独な美しい言葉を話す。間違いなく、アメリカ人やヨーロッパ人よりも優れている。しかし、口数の少ないフィンランド人に近い。突然の沈黙は、全て説明の必要がある話の落ちや何かとは違い、美しく保つに値するものだ。日本では伝統的に、静かに食事を楽しむのが行儀が良いと見なされる、同じ様に、フィンランドでも多くが関連し、文化を構成する複雑なパズルも同じようだ。日本でに驚きを求めにきた旅人でさえ、明るいネオンカラーのプラスチックサインと小さな土地に数百万以上の人々が群れていることで知られているこの国で、雄弁でエレガントな静寂を見つけることは驚きである。

ある土曜日、私は土曜日にしか開いていない近くの小さなカフェを訪れた。そして、時々するように、私はラジオから聞こえてきた“What a Wonderful World”の曲に合わせて口遊んだ。1つの出来事がつながり、私は4人の（オーナーと2人の客）中の1人の聴衆のために書いた幾つかの歌をうたった。再び、フィンランドと日本は素晴らしく進展した。有名なフィンランドのディレクター、アキ・カウリスマキは、カップルのお気に入りの映画が彼のものだと言ったら喜ぶだろう。また、私はフィンランドの夏のコテージ近くで撮影した写真と似たものが、壁に掛かっているのを見つけ喜んだ。それを思うと、すべてが非常に“カウリスマキ”の映画のようだった。



しかし、文盲であることは、特に作家にとってショックであり挑戦だった。ひらがなとカタカナを読むことができても漢字を使えないということは、話し言葉だけに頼らざるを得ないことを意味する。限られた語彙で、私が最も頻りに喋った言葉は「あなたは英語が話せますか？」だ。しかし、私はすぐに犬の飼い主や両親に、日本語で犬や子どもを褒めることで、彼らとつながり始めた。意義のある縁を作るのに、多くの言葉を知る必要はない。美しいものや可愛らしいものはあなたを遠くへ連れて行き、家にも連れて行ってくれる。木、花、鳥、雨、日差し、スーパー、車なども人との会話の糸口になる。人生の要素である。確かに、フィンランドの車はメンテナンスが十分ではなく、光るようにきれいではないし、近所の店も豪華な鎮守の森の隣にはない。しかし、それは素敵な木々とバルト海の近くにある。引き分けだろうか。そう言えば、スーパーでの木について会話をするうちに、素敵な日本の家庭での昼食の招待に預かったことがあった。



寛容な心、笑顔、そして優しさをいたる所で見た。村田さん達と真木子さん、レジデント仲間のAliceとLynnは暖かく助けてくれ、素晴らしく寛大で親切。近所は静かで安全だったが、東京は迷子になり呆然としても安全だと感じた。なぜなら、何か起きた時、いつも誰かが私を助けてくれた。人々は混雑した地下鉄で席を譲り、正しい方向、時には間違ったプラットフォームへ連れて行く。私は毎日、仲間の素晴らしい優しさ、そして世界で最も愛らしい子供たちを見るなど、これらの体験への感謝の気持ちに圧倒された。

私は北欧女性なので、自身の考えを話したり書いたりする権利に誇りを持ち、強く主張する。また男女平等の考えを貫く。慣れ親しんでいた社会とは、まったく異なる中で窮屈に感じるかもしれないと恐れたが、結局のところ、私は自分自身を最初に個人として認識した、あるいは認識したのだろうか？



私はいつも自分自身のために、正義を超えた正義感を持っていた。幼い頃からずっと、私より不幸な人たちのために戦ってきた。フィンランド的方法で、皆の世話をすることを心に抱き続け、息子の母親という最も人生で意味深い役割も果たしている。いざれにしても、個人の周りに構築されていない社会で、やりとりされるのが、抑えた感じではなく、私は西洋のものと比較して日本の生活の仕方についてもっと進んだものがあると思っていた。それは個人に焦点を当てることによって、私たち西洋人は、関心を持ち、気かけ、愛することができないので、彼女あるいは彼が必要とする成功を人に与えることができない。島にいても、人は一人では生きていけない。私たちが一緒にそのようにすることで、私たちは唯一存在できる。

期待外れは世の常。私が暮らした、フィンランド、米国、ドイツとシステムがどのように違うのか、私はもどかしく感じた。また、システムがどれほど優れているとしても、人間は改善を願うものであり、比較は進歩の重要な要素の1つだ。私は日本人が非常に孤立していると感じた。彼らは、また、より多様な選択肢にアクセスすることで恩恵を受けるだろう。例えば、すべてのものは、一見ではなく幾重にもプラスチックで包装されているように思えた。徹底した廃棄物処理とリサイクルシステムにもかかわらず、日本でさえ人間は責任を負わない。リサイクルには多くの努力が必要であるが、効果的にリサイクルできていない。世界は文字通り無駄に溺れているので、世界でも大きな経済圏の一つの日本で改善することを切望する。もし日本が孤立していなかったとすれば...

しかし、その後、私はここにいることに気付いた。考えや選択肢や文化の交流を創造することは日本では欠けていると感じているが、村田さんご夫妻とフィンランドの作家協会は、その障壁を打破することの一翼を担っている。私も、より大きな相互理解と感謝の方向に流れる一滴の水であった。日本は物語の一部になり、それは私を変え、貴重な教訓を教えた。同様に、私が触れ合った人々を通じて、私も日本の物語の、ごくごく小さな一部分になっていた。私は想像上の日本について書き、読者と共有する。そして、個人的には、驚くほど親切な、そして唯一無二の日本でのこの時の贈り物を忘れることはない。他のどこで目を覚ましたとしても、巨大なバナナの木の葉が、窓の外で夜の間に芽生えていたことに気がつくだろう。多分、生命の力強さをあなたに伝えるために。そしてあなた自身もそうであると。ありがとう！ありがとう！

